



ほ
り
シ
イ

スクールソーシャルワーカーだより 32

こと ほりかわしげとし

horikawassw@gmail.com

空きピンに 猫じゃらし

子らは駆け去って

☆ 五百円札 の巻 ☆

長崎は、明治維新直前に長崎造船所が開設されて以来の造船の町。

当 S SWはこの造船所のすぐ西の入江、西泊^{にしどまり}で育ちました。鎖国体制の長崎港を交代で警備する、肥前/黒田藩の百人番屋があった町でもありました。

☆

ある日、仏壇に置かれた五百円札を盗って輪ゴムを一箱買い、近所の子たちと輪ゴム釣りをして遊びました。両手で盛り上げた砂に、輪ゴムを何本か隠し、交代に木の枝ですくう遊びです。

この悪事はすぐに母親に知られ、帰宅して話を聞いた父親に腕をつかまれ、外に放り出されました。泣きながら板戸を叩いて謝っても、家に入れてもらえませんでした。

小さな入江の夕暮れは、山からバケモノが降りて来そうな、恐ろしい闇の世界でした。

ちなみに、当時の五百円は大金でした。まだ1円で買える駄菓子があり、当時の五円は、今の百円以上の価値があったようです。

そして、当時のお金に対する感覚もまた、今とは比べものにならないくらい、貴重なものという感覚があったと記憶しています。

★

あれは、「盗みをする子はウチの子ではない」という言葉、有無を言わさぬ父親の強さが印象付けられた出来事でした。

たとえ家族のお金であっても、人のものを盗る事は悪い事と知った記憶が、当 S SWの善悪の判断に、大きな影響を及ぼす出来事でした。

☆☆

当 S SWは、大金を盗んでしまったのですが、あなたには、悪い事をしていると意識しないままの悪事の記憶はありませんか？

どちらかと言えば遊び心でしてしまった、後味の悪い事。

そのまま叱られなかったらどうでしょう？

もしもあなたが、そんな悪事を見つけた時、どのように諭しますか？

大事なのは、悪い事したら罰を受けると教えるのではなく、そのような行ないが恥ずかしい事であり、親にはとても悔しい事と伝える事ではないでしょうか。

罰する事で罰にばかり目が行き、見つからなければ、悪い事しても大丈夫、そう思わせてはなりません。

